

「資質・能力」発現のおもしろさ

——中学校での指導を中心に——

加藤 健伍

1 はじめに

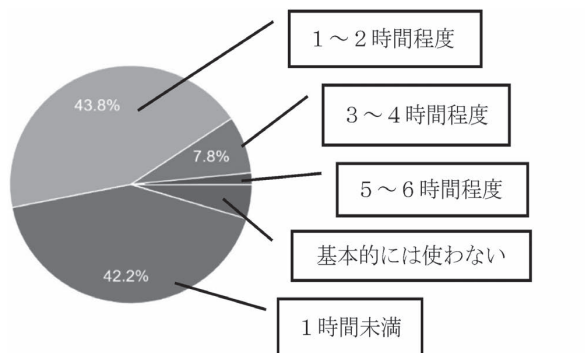
教師として、生徒の「資質・能力」が発揮される場面を見ていると「おもしろい」と感じるが多々ある。例えば、授業の内容を応用して授業の内容以上の考えをもつ、授業や教材の不十分な点に気づく、行事で伴奏したり動画を編集したりする、部活動で努力して活躍する、といった場面がある。こうした生徒の個性が発現する場面を国語科の授業においても作ることに、それが本発表の主旨である。

「おもしろい」ということを定めていくのは難しい。教師も生徒も「おもしろい」と感じていれば、ベストであろう。それはつまり、教師が設定する学習目標や指導内容と、生徒がもつ興味・関心、知識や力とがピッタリと一致している、ということである。教師は授業をする際、いつもこのすり合わせを行っていると言っても良いだろう。

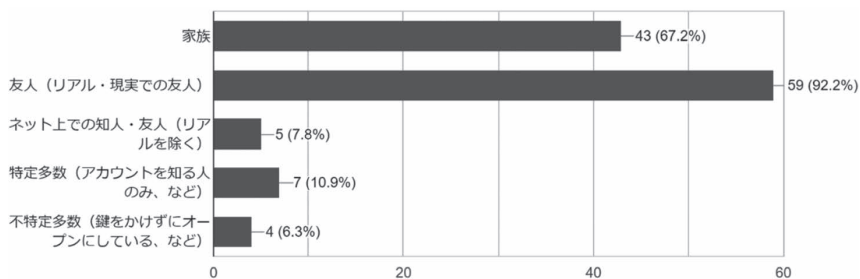
生徒の「資質・能力」の発現を考えると、言語活動は不可欠である。教師は学習目標や指導内容を吟味して言語活動を設定する。それは果たして、生徒の日常的な言語生活とどれくらい関係があるのだろうか。目の前にいる生徒の言語生活の実態を少しでも把握したい、そう考えて授業を行っている生徒にアンケートを実施した。アンケートは、日常の言語生活においてスマートフォンやPCなどでSNSや電話を通じてやりとりをする場面が多いと仮定し、その使用頻度や使用する際の文字数などを聞いた。結果は次のようなものである。

この結果を次のように分析した。「1〜2時間程度、家族や友人とのやりとりで使用」「文字でのやりとりはほとんどが1〜2行程度」「100字を超えることはない」「音声でのやりとりは短時間、もしくはしない」「中には1時間以上する場合も」「ある程度の字数を書くことは、学校での活動くらい」「一定数は、日常的に書く生徒も多い」。そこで、生徒は文字を介したコミュニケーションをする場面が多く、その際の字数は少ない、と仮定した。

平均して1日にどれくらい、そのコミュニケーションに時間を使っていますか。
64件の回答

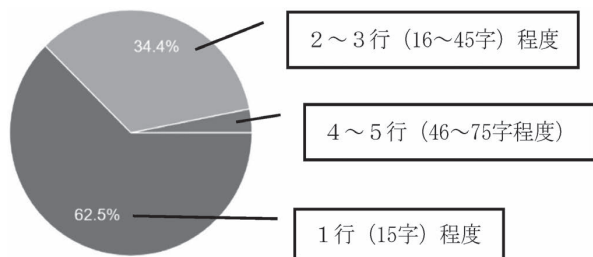


そのコミュニケーションの相手はどういった人が多いですか。(複数回答可)
64件の回答



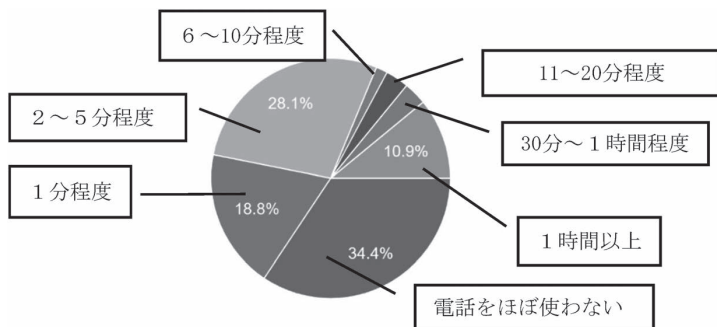
LINE やメール、Twitter などの文字によるコミュニケーションでは、どれくらいの字数でやりとりすることが最も多いですか。

64件の回答



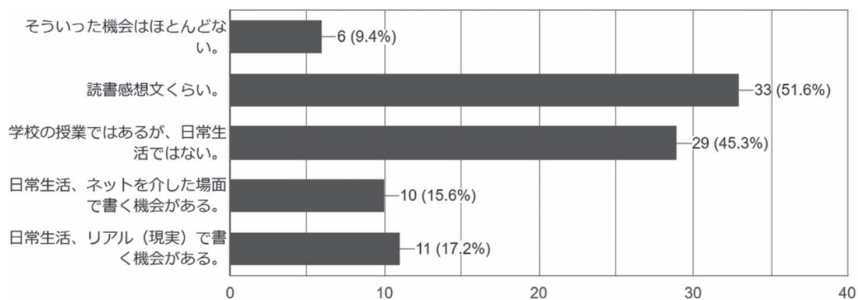
電話などの音声のコミュニケーションでは、どれくらいの時間でやりとりをすることが最も多いですか。

64件の回答



200字以上の文章を書く機会がありますか。またそれはどのような場面ですか。(複数回答可)

64件の回答



それを授業に落とし込むために次のように考えた。「ひとまとまりの思想を文章にしていける経験の少なさ」「手書きで多い字数を書くとなると抵抗感が高い」「むしろ状況や心情に合った短い文を選択することが多い」。そして、「短い文に考えや工夫を込める・読み取る活動を指す」「自分が込めた考えや工夫をまとまった字数で説明する」という授業指針を立てた。以降にこの指針を軸にした二点の授業実践について述べる。

2 実践① 中学校2年生「カメレオン」(チエーホフ)

(1) 授業について

国語科の授業を考える際、授業者は教材から最も効果的な問いを探し、それを授業過程に落とし込んだり、板書に反映させたりする。学習者は提示された問いを考え、ワークシートやノートを書いたり、話し合ったりする。この固定化された一方的な授業の流れを変えようとする動きは様々あるが、本校の国語科では「学習者が自ら問いを立てる」ことを手掛かりと考えた。

学習者は小説を読む際、登場人物の心情や全体の印象に目を向けやすい。「カメレオン」においては、オチュメーロフがころころと言葉を変える様に注目し、その都度の心情の変化や、作品全体の滑稽さが、初読でつかむところであろう。題名と内容との連関についても、初読で疑問に挙がってくるのが予測される。まずは自ら立てた部分的な問いを考えていき、続いて、小説全体を含んだ題名にま

つわる問いを考えさせたい。それらの問いを考えた後に「カメレオン」という題名の意味が、登場人物の特徴を表すものとして理解されてきて、さらにそこに作者の意図を探る手がかりを見出すことができるだろう。つまり、自ら問いを立てて小説を読んでいたことが、次の課題の発見につながっていくのである。

学習者がつまづきやすい問いは、これまでの学習や経験によって形成される。これまでにしてこなかった読みや、普段は考えないような問いについては、ときに授業者から与える必要がある。「カメレオン」においては、作者の意図や作品が成立した社会的背景を含んだ問いが、これにあたる。学習者から出るにせよ授業者が与えるにせよ、問いを通じて作者の社会に対するものの見方・考え方に迫っていく、さらに学習者が自らの社会に対するものの見方・考え方を表現することが果たせれば、探究的な深い学びを得られる、と考えた。

上に述べたように、「カメレオン」を小説の社会を語る側面としてとらえることを手がかりとする本実践では、小説を「窓」であると考えた。小説を読むことで、小説世界にとどまらず、作家が見た世界を追体験することを目指す。またそこに直接関与するのではなく、作家が見た世界を間接的に見ることも、「窓」とした理由である。「窓」を通じて間接的に社会を見る目をもった学習者たちに、今その目の前に広がる社会に目を向け、それを語る言葉を探ってほしい。自分たちのすぐ近くの風景だけでなく、その外に広がっている景色に目を向けてほしい。「カメレオン」という「窓」から見えた景色を通じて、学習者たちが社会に対して「窓」を開いていくことを期待したい。

指導計画(全5時間)

第一次 初読の感想から問いを挙げ、分類し共有する(＊)。

(1時間)

第二次 ②から③、④、⑤の順で、登場人物についての問いを

考え心情や相互関係を整理する。(2時間)

第三次 ①を考え、小説を社会風刺を語るものとして解釈する。

(1時間)

第四次 自分の社会を見るものの見方・考え方を語る言葉を探

る。(1時間)

＊生徒たちが挙げた問い

- ① なぜ題名がカメレオンなのか
- ② 「外とう」とオチユメーロフの心情の関係
- ③ 「群集」のあり方について
- ④ 表現・構成について
- ⑤ 小説の設定について

教材観

「カメレオン」は1884年に発表された短編小説である。登場する警察署長オチユメーロフが、他の登場人物の発言にころころと態度を変える姿やその根本にある権威主義と、発言者の権威性を考えられていない姿との矛盾を鮮明に描いている。その様子は、クリミア戦争に敗北し、急速に近代化していくロシアや、それを主導していた知識人たちの姿と重なるものとして描かれ、作品は風刺としての側面を強く有していると言える。また、作家として生計をたてて

いくことが難しかった作者が、自身の作品を作り上げていくことより、求めに応じて作品を書いていく自身の姿を重ねているものとも読むことができる。これらのことから、本作品は権威主義のもとで成り立つ社会や、そこに生きる個人に対する風刺の側面を強調して扱うことができるものであると考える。

指導観

新指導要領の「教科の目標、各学年・各科目の目標及び内容の系統表」において、小学校での教科目標では「日常生活」がキーワードであるのに対し、中学校では「社会生活」、高等学校では「実社会」「生涯にわたる社会生活」がキーワードとして挙げられている。中学校では個人の学びを支えとして、「社会生活」を念頭に置きながら、自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れることが求められているととらえた。自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れること、それ自体は高等学校での目標になるわけだが、それを叶えていこうとする学びに「探究」の手掛かりをみたい。

このことを小説の読みにあてはめて考えてみる。学習者は小説を読む際、登場人物の心情や全体の印象に目を向けやすい。それらは小説を読む際に授業者たちが中心的に扱う事柄であり、この傾向をもつこと自体は自然なことである。小説の新たな側面として、作者の社会事象へのまなざしがあることに注目させたい。小説に表れる作家の社会へのまなざしに気付くことで、これまでの読みを広げ、さらに社会認識を涵養できると考えた。

「カメレオン」においては、オチユメーロフという人物が警察署長である、という設定がなされている。この設定は例えば「羅生門」で人物の固有名詞が用いられず、下人の姿は多くの人間にあてはまるものとして読むことができる、というものとは対比的である。「カメレオン」には風刺の側面が強くと考え、風刺の対象は人間一般の姿ではなく、社会での権力のあり方であると見え、扱ってきたい。「カメレオン」にある社会への風刺を読み取ることで、小説が社会を語る面をもつことを意識して読み、さらに「実社会」への感性を自ら表現する手がかりとしてとらえていきたい。「読む能力」とどまらず、自分の意見を表現する力を育みたいがためである。小説の読みから得た視点を、社会事象を語る言葉を探っていくことにつながってきたい。

小説を手掛かりに社会事象について考えていくことは、いくらかの飛躍を含んでいる。それを学習者の力で行えるようにするために、まずは自分たちで問いを考え、部分的なものから読みを積み重ねていき、全体にまつわる読みを作り上げていく。その後、作者の見た社会を見つめ、さらに自分たちの生きる社会を考えていくことができるよう授業過程を仕組んだ。

(2) 言語活動

以上の授業計画で授業を行い、生徒はそれぞれが見ている現代社会の在り様を「カメレオン」にならって名詞で表す活動を行った。以下がその一覧である。

ここからさらに、この言葉に込めた考えを200字程度の文に述

番号	現代社会を表す言葉
20	オセロ
19	ケーキボックス
18	白
17	ドミノ
16	水
15	ドミノ
14	カフェオレ
13	鉄
12	磁石
11	多角柱
10	ゴムボール
9	イシモチソウ
8	かき氷
7	メロンパン
6	わめくナマケモノ
5	ツナ缶
4	マネキン
3	ガラス細工
2	サイコロ
1	月

番号	現代社会を表す言葉
40	ふるい
39	ホッキョクグマ
38	ふるい
37	お化け屋敷のカップル割り
36	お化け屋敷のカップル割り
35	お化け屋敷のカップル割り
34	お化け屋敷のカップル割り
33	オセロ
32	風車
31	絵具
30	赤シート
29	きれいな川
28	雨
27	月
26	ものさし
25	オセロ
24	月
23	クロワッサン
22	魚
21	メイク

べる活動を行った。

言葉や込めた考えは多分に批判的で、それぞれの視点はメディアによって作られた部分も大きい。そうしたことに自覚的でない状態てただ批判する立場をとることは、危うさを含んでいる。しかしまず、こうした言葉で現代社会を語る生徒たちの「資質・能力」を「おもしろい」と感じる。現代社会の様相をとらえようと、それを表現するのに最もいい言葉を探している際の生徒の姿は、「おもしろい」と感じられた。非常に主観的ではあるが、本実践の言語活動は以上のとおりである。

3 実践② 中学校3年生 「俳句をよむ」

(1) 授業について

学習者の表現する言葉をおもしろいと感じることがある。短い言葉の中に様々な解釈をもたせていたり、絶妙な間で言葉を挟んだりする。こうした経験から、学習者は短い言葉におもしろみをもたせながら生活しているのではないかと、仮説を立てた。この仮説を基に、まずは短い言葉によりこだわって表現させること、そのこだわりのある程度まとまった字数の言葉で表現させること、の2つを目標に据えた。

学習指導要領では言語活動例として俳句の創作は挙げられているが、本校で使用している教科書では、2社のうち1社は俳句創作の単元は組んでいない。組んでいる1社も、評価の基準などは明瞭でなく、あくまでオープンエンドの発展的な単元として組んでいる。

しかし、テレビ番組などの影響もあってか学習者の俳句創作や俳句の評価への意識・関心は高く、俳句創作に主体的に取り組むことができると考え、俳句創作を主たる活動として組み込んだ。

俳句創作においては、本単元の開始時（俳句を読みよりも前）にそれを予告し、継続的に俳句創作への意識を喚起してきた。また、自分の誕生日を含む季節の季語を使い、五・七・五を基本とするここととした。加えて、創作において工夫した点や込めた思いを200字以内で書かせることとした。

俳句の読解だけでなく和歌の鑑賞にも俳句創作のヒントを求めることで、読解や鑑賞の活動にも主体的に取り組めるように意識し、延いてはそれが創作した俳句を評価する観点にもなることを伝えて単元を継続的に進めてきた。

指導計画（全9時間）*長期的に行っている単元であるため、配当時間は目安。

第一次…俳句の読解をする。（6月 3時間）

第二次…和歌の世界に親しむ。（9月 3時間）

第三次…俳句を創作し、創作した俳句を鑑賞しあう。（11月 3時間）

(2) 言語活動

以上の授業計画で授業を行い、生徒それぞれが俳句を詠んだ。俳句を詠む指示をしたのは6月で、実際に提出を求めたのは11月であるため、その間に考え続けて詠んだものである。（句切れ、季語につ

いては詳細な指導が入れられず、句切れが複数ある句や、歳時記と異なる季節の設定のものもある)

- ① 新人生 一月(ひとつき)のように 卒業生
- ② 桜吹雪 一面に広がる 蕾かな
- ③ 葉桜や 急ぎたつ人の ベールかな
- ④ 少年よ 太陽を呑む 雲の峰
- ⑤ 鯉のぼり はためく空は だいたい色
- ⑥ 虹かかり 空も心も 晴れ模様
- ⑦ 夕焼けと さざ波の音 染みわたる
- ⑧ 頬つたう 蛙なきけり 計の報らせ
- ⑨ 雲の峰 ごうとふくそばの 風ありけり
- ⑩ 移り気な 紫陽花の色と 空の色
- ⑪ 傘と共に おどる値札や 梅雨はじめ
- ⑫ 短冊に 十色の願い 万華鏡
- ⑬ 我が生辰 夏の学び舎 なかりけり
- ⑭ 昼下がりに うだる朝顔 僕の色
- ⑮ 時すぎて 風が吹いても 炎天下
- ⑯ 火花散り 一人で帰る 暗い道
- ⑰ 夏終わる 白き課題や スイカの皮
- ⑱ 彼岸花 涼風引き連れ 咲き揃う
- ⑲ 漕ぎ終わり 暑さ忘れる 9月のそよ風
- ⑳ 彼は誰に ひやりと香る 金木犀
- ㉑ 下校時の 空の暗さで 秋を知る
- ㉒ 秋の虫 きれいな声だが 見たくない

- ㉓ 紅葉のよう 変わりゆくのは 胸の内
- ㉔ 風吹けば 秋のせつなさ 香り出す
- ㉕ 霧深し 吐息白色 家を出る
- ㉖ 秋晴れの 大空の下 立つ私
- ㉗ 儂げに 川面に移りし 星月夜
- ㉘ 名月の 水面に浮かぶ 淡い影
- ㉙ 赤い羽根 季節感ずる 始まりの日
- ㉚ 月団子 砂糖じょうゆの 香りかな
- ㉛ ピンポーン ドアの向こうに ヴァンパイア
- ㉜ 桂浜 しおり片手の 秋の音
- ㉝ この寒さ 未だ染まらぬ 紅葉や
- ㉞ 落ち葉落ち 流され見るや ただ枯れ野
- ㉟ 寒き夜 羽毛布団に 包まれて
- ㊱ 風牙ゆる 池の隅にて 沈む鯉
- ㊲ 外で鳴る 北風小僧の 寒太郎
- ㊳ 北風や 端山の早暁 かけ廻る
- ㊴ イヤホンを 片方外し 眺む雪
- ㊵ 珈琲の 海に溶けゆく 雪見だいふく
- ㊶ 年が明け 戻る時計と 戻れぬ時間
- ㊷ 大寒に まだ見えぬ春 背伸びして
- ㊸ 冬の空 我包む繭 白色に

ここから生徒が5句を選んで投票し、集計した上位5句を決定した。生徒を10班に分け、その上位5句について1句につき2班をあ

て、解釈を発表し合う活動を行った。同じ句を読んだ班で解釈が異

なったり、共通して解釈している箇所があったりと、生徒が詠んだ

俳句を読み合う活動を仕組んだ。さらにその後、解説集も読み合い、

詠み手にとって込めた思いが伝わっているか、読み手にとって解釈と読んだ工夫が一致しているか、といった観点で意見交換を行った。

授業者としては、もう少し日常的な、身近な題材が多くなるかと考えていた。しかし生徒はそれぞれに題材を工夫して選び、自分の感覚を表現できる言葉を吟味に吟味を重ねて選び取っていた。その姿もまた、「おもしろい」ものであった。

4 おわりに

2つの実践を通して、短い言葉に思いや工夫を込めるといふ言語活動のコンセプトの可能性を示すことができた。また、その思いや工夫を述べるとなると、200字程度のまとまった字数の文章を書くことについても抵抗感を下げて実践できることを示すことができた。こうした授業過程をコンセプトとすることで、生徒の「資質・能力」が遺憾なく発揮されると考える。繰り返しになるが、非常に主観的に述べることを避けずに言って、表現活動をしている生徒たちは「おもしろい」と感じているように見えた。学習目標や指導内容と照らし合わせて考えた時、教師にとっても「おもしろい」ものであった。

こうした主観的な「おもしろさ」から授業構想をして言語活動を仕組んでいくことも、授業のコンセプトとしての1つの可能性を

(広島大学附属中高等学校)